

17. 移住者とその生活

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/46939

17. 移住者とその生活

北嶋 勇介

1. はじめに
2. 能登町の移住環境
3. 村営住宅の建設と現在
4. 県内外からの移住者
5. 考察
6. おわりに

1. はじめに

今回の旧柳田村での聞き取り調査では、生まれも育ちも柳田村といった方以外にも石川県内外から柳田村に移り住んだという方からも多くのお話を伺うことができた。地域のことを考える上で他の地域から移り住んだ人たちはどういった理由で移り住んだのか、また移り住んでからの暮らしの変化などに興味を持った。そこで、本章ではまず2016年現在の能登町全体の移住環境、そして全国の移住環境について触れた後、村営住宅の建設と現在、県内外からの移住者、そして考察について順に述べていきたい。

2. 能登町の移住環境

上町地区の移住者について述べる前に現在の能登町全体での移住環境について先に触れたい。移住を決める際には移住先の受け入れ態勢、つまりは各支援制度が充実しているかどうか重要な判断材料になってくると考えられる。

「石川県能登町定住・移住ポータルサイト」では求人・企業がピックアップされている。また同サイトの紹介では能登での暮らしを体験するための家（体験の家）も開設されている。1週間～3カ月程度利用することができ、また体験料は水道やガス、光熱費などの実費を除いて基本無料になっている。

2.1 移住・定住に関する支援制度

住居に関する助成金には次のようなものがある。

- ・能登町第1次産業I・Uターン支援助成金
- ・ふるさと定住住宅助成金
- ・空き家家財道具等処分助成金

定住助成金等には次のようなものがある。

- ・能登町定住促進助成金
- ・能登町雇用促進助成金

起業支援等の施策には次のようなものがある。

- ・ 創業・継承支援事業補助金
 - ・ 能登町産業育成・活性化事業補助金
 - ・ 公益信託「能登町エンデバーファンド 21」
子育て支援施策には次のようなものがある。
 - ・ すこやか赤ちゃん給付金
 - ・ 児童手当制度
 - ・ 第2子より保育所利用料半額
 - ・ 第2子より保育所利用料無料
 - ・ 子ども医療費給付事業
 - ・ 児童扶養手当・ひとり親家庭等医療費助成制度
- 上記の他にも様々なサポート施設・サポート活動が存在する。

2.2 近年の移住状況

石川県能登町定住・移住ポータルサイトによると、旧柳田村地区では平成 27 (2015) 年では 3 組 4 名、平成 28 (2016) 年では 2 組 2 名の移住者がおり、また能登町全体では平成 27 (2015) 年 11 月 17 日時点では 7 組 13 名、平成 28 (2016) 年では 14 組 27 名の移住者がいるという。

また、先述した体験の家の利用に関しては、平成 28 (2016) 年度現在の状況として、黒川は利用実績なし、小間生は 4 組 7 名の利用とのことだった。

3. 村営住宅の建設と現在

『柳田村 30 年のあゆみ』(2005 : 83) によれば、旧柳田村の住宅建設は古くは教員用住宅に始まり、平成に入ると過疎対策の一環として若年者の村内定着を目的に建設された。平成元(1989)年から国光地内のひかり団地に始まり、さくら団地、いしい団地、わすみ団地と建設が続けられ最終的には 27 棟 56 戸の賃貸住宅が完成している。ここでは特に上町地区のわすみ団地について詳しく述べる。3.1 の内容に関しは『柳田村 30 年のあゆみ』から、3.2-3.5 の内容に関しては A さん(わすみ団地、男性、30 歳代)から伺った話をまとめる。

3.1 わすみ団地の概要

旧柳田村がわすみ団地を建設する以前は、わすみ団地の周辺には誰も住んでいなかったという。わすみ団地は自然豊かな村の景観に配慮して建築されており、軒の出の深い、切り妻大屋根を有し、外壁は上壁が真壁しっくい塗り風、下壁が杉下見板張り、屋根には黒の地場釉薬瓦など村内の伝統的な民家の様式に近づけられている。またこのことが評価され第 10 回いしかわ景観賞にも選定されている。現在では、能登町出身の所帯を

持っている人が多く住んでおり、特に 20 歳代中頃から 40 歳代の子育て世代が住んでいるという。その中でも宇出津から移り住んでいる人が多いという話だった。

3.2 わすみ団地の地区組織

わすみ団地の地区組織は区長のみで、任期は 1 年となっている。区長は立候補者がいない場合くじ引きで選出される。区長の仕事は主に区費の徴収と収支報告で、区費の徴収は年度の初めに、収支報告は 3 月の中頃に行うという。また、区費の用途としては電気代、水道費、能登町への寄付、公民館協力費がある。

3.3 わすみ団地の年間行事

わすみ団地では年間行事はほとんど行われぬ。6 月または 7 月に草刈りがある程度だという。これは、わすみ団地は若い世代が多いため出入りが激しく、長く住むという人が少ないため先頭に立って行事の企画をする人が現れないためという話だった。子ども会を作るくらいに子どもの数もいるが、上記の理由のためなかなかできないという。また、地区のお祭りにもわすみ団地として参加することはないということだった。

3.4 わすみ団地の子どもたち

先述のように、わすみ団地には子育て世代が多く住んでいるため子どもの数も多い。わすみ団地に住んでいる子どもはほとんどが柳田小学校に通っているが、親の職場や実家の都合で宇出津小学校や松波小学校に通っている児童もいるという。宇出津、能登町、珠洲市などにスポーツや習い事をしに行く子どもも多いという。また、子ども会などは存在しないものの、団地内には公園もあるため、子どもを通しての母親同士のつながりはあるが父親同士のつながりというのはあまりないということだった。わすみ団地内でのトラブル自体は少ないが、子ども関係のトラブルは少々起こるという話もあった。

3.5 わすみ団地の冠婚葬祭

わすみ団地では基本的に既婚の人たちが移り住んでくるため、旧柳田村地域で式を挙げるということはなく、また葬式に関しても住んでいる人が若いため人が亡くなるということはない。冠婚葬祭に関しては実家に戻って行うことがほとんどだという。

3.6 わすみ団地の人口分析

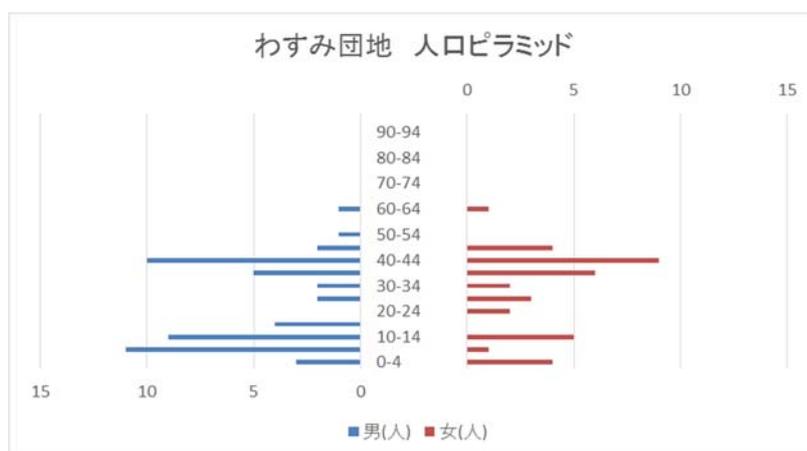
先述したようにわすみ団地では 20 歳代中頃から 40 歳代の子育て世代が多いという話だったが、事実その通りで下の表からも分かるように 30 歳代後半から 40 歳代前半の方が非常に多く、また 10 歳代前半までの子どもの数も非常に多い。さらに上町地区全体の表と比較しても分かるように上町地区全体では 60 歳代、70 歳代の割合が非常に

高いのに対して、わすみ団地ではその年齢層がほとんどいない。わすみ団地の人口は上町地区全体の人口の 10%未満の割合ではあるが、明らかに地区全体の傾向とは異なることが分かる。

年齢(歳)	男(人)	女(人)	計(人)
0 - 4	3	4	7
5 - 9	11	1	12
10 - 14	9	5	14
15 - 19	4	0	4
20 - 24	0	2	2
25 - 29	2	3	5
30 - 34	2	2	4
35 - 39	5	6	11
40 - 44	10	9	19
45 - 49	2	4	6
50 - 54	1	0	1
55 - 59	0	0	0
60 - 64	1	1	2
65 - 69	0	0	0
70 - 74	0	0	0
75 - 79	0	0	0
80 - 84	0	0	0
85 - 89	0	0	0
90 - 94	0	0	0
95 -	0	0	0
計	50	37	87

(出所：2016年3月31日付の住民基本台帳より集計し作成)

図1 わすみ団地の性別年齢層別人口構成



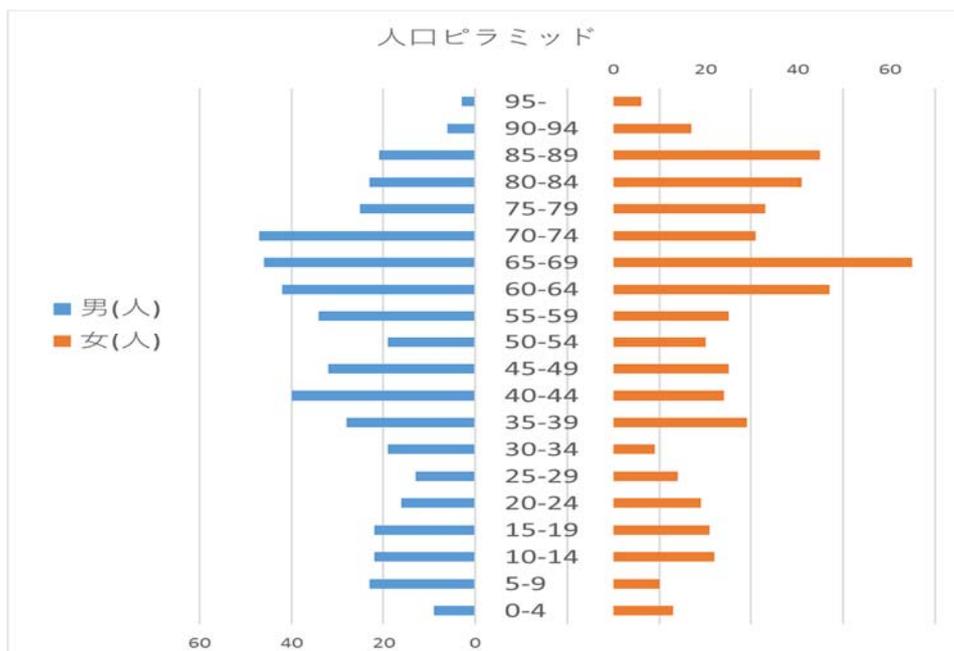
(出所：2016年3月31日付の住民基本台帳より集計し作成)

表2 上町地区全体の年齢分布

年齢(歳)	男(人)	女(人)	計(人)
0 - 4	9	13	22
5 - 9	23	10	33
10 - 14	22	22	44
15 - 19	22	21	43
20 - 24	16	19	35
25 - 29	13	14	27
30 - 34	19	9	28
35 - 39	28	29	57
40 - 44	40	24	64
45 - 49	32	25	57
50 - 54	19	20	39
55 - 59	34	25	59
60 - 64	42	47	89
65 - 69	46	65	111
70 - 74	47	31	78
75 - 79	25	33	58
80 - 84	23	41	64
85 - 89	21	45	66
90 - 94	6	17	23
95 -	3	6	9
計	490	516	1,006

(出所：2016年3月31日付の住民基本台帳より集計し作成)

表4 上町地区全体の性別年齢層別人口構成



(出所：2016年3月31日付の住民基本台帳より集計し作成)

4. 県内外からの移住者

「3. 村営住宅の建設と現在」において、わすみ団地の人々の暮らしについて述べたが、今回の聞き取り調査では石川県内の他の市町村から柳田地域に移住し、働いている方や石川県外から柳田地域に移住した方からもお話を伺うことができた。またお話を伺った方の中には、石川県外から石川県内の柳田地域以外の場所で暮らしたのちに柳田地域に移住された方もいらっしやった。本節ではそういった方々の生活について記述していきたい。

Bさん（百万脇、男性、50歳代）

Bさんは、現在石川県柳田星の観察館「満天星」に勤めている。満天星は、昭和63（1988）年に旧柳田村が環境庁の「スターウォッチング星空の街コンテスト」で表彰されたのを機に5年後の平成5（1993）年に建設されたが、Bさんは満天星開館時に職員に採用され、旧柳田村に移住された。移住される前にAさんは金沢市で製造業をされていたが、元々星を観察することが趣味であったこともあり、一般公募に応募したという。旧柳田村に転職することに関しては収入や仕事内容が大きく変わることもあり当初は高いハードルを感じていたという。また、移住した当時はスーパーマーケットが7時に閉まることや町に大きな本屋、電気屋がないことなど金沢での生活に比べて不便さはあったという。しかし、その一方で自身の子どもの頃を思い出し、多少の不便さも含めて自然に囲まれて暮らすということが人間らしい生活ではないかと思ったともおっしゃっていた。

Bさんは10年ほど前（2006年頃）に柳田地域に家を建てたということだったが、それ以前はさくら団地に住んでいた。さくら団地に住んでいた頃は近所や地域との交流は少なかったが、家を建ててからは地区に混ざって祭りに参加したり、共同の草刈りに参加したり、また近所の方の葬儀の手伝いに行ったりという交流が生まれ、地域とのつながりを徐々に感じるようになっていったということだった。

Cさん（天坂、女性、60歳代）

Cさんは石川県外から45年ほど前（1971年頃）に集団就職で金沢市に移住し、その後現在のご主人と金沢で知り合い、結婚を機会に40年ほど前から柳田地域に住むようになったという。現在は夫婦二人で板金の仕事をされている。

中学校を卒業してすぐに集団就職で移住したため、冠婚葬祭などに関しては出身の県と柳田地域では違いがあるということは分かるが、具体的な違いまではよく分からないということだった。また、方言の違いに関しても、出身の県よりも石川県での暮らしの方がはるかに長いために、まったく出身の県の訛りが出ることはなくむしろ所用があつて実家に帰った時に実家の方言の方が聞き取ることができないほどだという話だった。

柳田地域に移住してからは、近所付き合いはさほど多くはなく、散歩をされていてすれ違う時にあいさつを交わす程度だったという。しかし、自身の子どもが幼稚園、小学校に入る頃には母親同士のつながりができ始めたということだった。婦人会や総会、運動会などの町内の行事は夫婦共働きのためほとんど出たことはなく、自営業でさらに共働きのため参加するのはなかなか困難だとおっしゃっていた。

Cさんは、自営業以外にも夫婦で畑仕事をされており、畑ではオクラやナス、トマトなどを作っているという。昔は成人し、家を離れた息子や娘にも家でとれた野菜を送っていたが、最近あまり送らなくなってしまったという話だった。また、近所の方々もそれぞれ畑や田んぼをもっており、野菜などを作っているため近所の方に野菜を分けたりすることはなく、主に自分たち夫婦が食べる分だけしか作らないという。

移住してきたものの、石川県での生活、柳田村での生活がすでに人生の4分の3以上を占めていることもあり、柳田はまさしく第一の故郷であるという話だった。

Dさん（上町、男性、70歳代）

Dさんは、元々県外の出身で、大学までは出身県で過ごし、その後就職を機会に石川県に移住された。現在は、奥様の実家に婿入りした形で住んでいるが、石川県の県職員を退職されるまでは、金沢市、珠洲市、穴水町、輪島市などを転々としていたということだった。Dさんは、現在森林アドバイザーやきのこアドバイザーの資格を有しており、森林での活動には作業道の修理や倒れた木の除去などがあるという。またDさんは、能登町老人クラブ連合会柳田支部上町老人クラブ会長や上町ボランティア代表を務めており能登町や上町地区の多岐に渡る活動にも積極的に参加している。

Dさんは移住後の生活について、冠婚葬祭や生活様式の違いは特に気にならず、出身地の訛りもいまではほとんど出ないという話をされていた。

Eさん（石井、男性、20歳代）

Eさんは、県外の大学で修士課程を終えたあと、県外の勤務を経て柳田星の観察館「満天星」で2011年から働いている。高校時代から星の観察に興味を持ち、大学で天文分野を学ぶことにしたという。学芸員の資格を取得し、県外の施設で嘱託職員として働いていたときに満天星の職員募集があり、就職を機に移り住んだ。移り住んだ印象としては、出身の地域と似ている言葉があったり、町の雰囲気が似ていたりしていることもあり親しみを感じたという。また祭りが盛んな印象もあり、現在はおいしい団地に暮らしており町内として祭りに参加したことはないが、いずれは参加してみたいということだった。満天星では毎月一回柳田小学校で空に関するクラブ活動の手伝いをしており、そこで地域の子どもたちとの交流があるという。また、満天星には上町地区の子どもも来るため同様に交流があるとのことだった。仕事が休みの時は、のと里山海道を利用して金沢まで買い物などをしに行くこともあるという話だった。

5. 考察

ここでは、これまで各節において取りあげた移住環境や移住後の生活事情についてより理解を深めるべく考察を行いたい。

第2節では、現在の能登町の移住環境について述べたが、能登町では多岐にわたる支援制度があり教育・福祉面の支援が充実している。「能登暮らし体験の家」は平成28(2016)年現在ではまだ開設ばかりであるため、利用実績こそ少ないが今後、移住・定住を考えている人にとって実際に住んでみるという体験ができるというのは貴重であり今後広く活用されていくのではないだろうか。能登町以外にも全国的な移住環境の流れを見てみると、平成27(2015)年から総務省では関係省庁と連携し、全国の自治体と共同して移住・就労・生活支援等のポータルサイト「全国移住ナビ」を開設している。このサイトでは全国の自治体のPR動画や移住者の体験談を閲覧することができ、仕事や住まい、生活環境や観光情報など様々な条件から移住先を検索することができる。また同年から東京駅前に総務省主管で「移住・交流情報ガーデン」が開設され47都道府県の移住に関する取り組みがパンフレット等で発信されているほか、移住アドバイザーが常時移住相談の対応をしている。もちろんこのサイトでは能登町の紹介ページもあり能登町の特色を知ることができ、「心あばれる」というタイトルのPR動画も見ることができる。全国の人がより簡単に能登町への移住に関する情報がこういったサイトによって手に入るようになってきたと思われる。

第3節では村営住宅の建設と現在について述べたが、平成元(1989)年に作られた村営住宅の中でも今回調査を行った上町地区のわすみ団地では現在、人口分析表が示すように多くの子育て世代が住んでおり、上町地区全体と比較しても非常にたくさんの子どもが暮らしている。Aさんから伺った話によると近隣地域から子育てのために実家を離れ引っ越してきた人が多く、住民の出入りが激しいとのことだった。地区組織に関してはほかの地区と異なり、区長のみで子どもが多くいるのにもかかわらず子ども会のような組織はない。住民の出入りが激しいことを考慮すると、Aさんから伺った話にもあったが、なかなか先頭に立って行事等の企画する人があられないというのも納得ができる。また、わすみ団地で暮らしている方の大半は結婚を済ませた子育て世代であるため、冠婚葬祭も近隣の住民と協力して、といったことはなく冠婚葬祭は各々実家に戻って行うということであった。しかしながら、近隣でのつながりが全くないわけではなく、子どもを通じた母親同士のつながりがあることはわすみ団地の特徴の1つとすることができるのではないだろうか。

第4節では県内外からの移住者について記述した。第3節のAさんを含めて今回の調査では5人の移住者の方に話を伺ったが、AさんとCさん、Dさんは結婚や実家に戻るなど家族関係の理由で、BさんとEさんは仕事の理由で移住したと言える。また、Aさんからは団地内での母親同士のつながりがあること、Cさんからは自身の子が幼稚

園、小学校と学校に通うようになってから母親同士のつながりができたという話を伺ったが、移住した後にいわゆる“ママ友”のコミュニティに入りそこから近所付き合い等も生まれるケースもあるのではないだろうか。この章を担当する私は秋田県秋田市生まれ秋田県秋田市育ちであるが、私が幼稚園から小学校にあがる時に市内の中心部から少し外れた地域に引っ越したことがある。その時のことを思い出してみるとやはり父親の方は特に近所との交流はなかったが、母親の方は近所の自分と同じ歳の子を持つ親とまず交流を始めていたように記憶している。

また、今回話を伺った方からは冠婚葬祭や生活様式、方言の違いに困ったという話はなかった。特に B さんは「柳田の人は優しく、来るもの拒まずで排他的な要素も薄い」と語っていた。私は秋田県から石川県金沢市と遠く離れた県に大学進学を機に暮らすようになり石川の言葉がわからなかったり、自分の言葉が通じなかったりという経験があったため、調査を行う以前に移住した人はきっと生活様式の違いや言葉の違いにおそらく苦労したのではないかと想像していた。しかし、今回話を伺った限りではそういった話はなく、B さんが話していたように柳田地域の移住してきた人に対する受け入れる姿勢がそういった違いを感じさせないということも考えられる。

6. おわりに

「地方創生」という言葉が主要な政策のキーワードにもなっている昨今であるが今回の調査では私は、移住というテーマで上町地区や能登町の移住環境、そして実際に移住された方の話を記述してきた。能登町としても新たな移住への取り組みが見られるようにこれから移住の形が変容していくのかもしれない。

最後になりますが、この報告書を書き上げることができたのは、聞き取り調査に関わっていただいた皆様のおかげです。情報不足の面もありすべての事柄を網羅しているわけではありませんが、その点についてはご容赦ください。この度は本当にありがとうございました。